

# 大中臣定忠自筆『大中臣系図』 (国学院大学日本文化研究所蔵 藤波家文書) とその内容

丸 山 陽 子

## 一 はじめに

国学院大学日本文化研究所蔵藤波家文書に、六通合巻の『大中臣系図』がある。この文書の概要は森瑞枝氏や『神宮祭主藤波家文書展解題目録』<sup>(2)</sup>に紹介されている。しかし、六通の文書の全容については未翻刻であった。拙稿「祭主大中臣定忠考―『兼好自撰家集』を手掛かりとして―」(『国語と国文学』第八二巻第三号、二〇〇五年三月。以下前稿と略す。)において、この六通の文書を翻刻紹介したが、紙数の都合もあり、その内容について触れることができない部分もあった。

そこで、本稿では、前稿を踏まえた上で、この文書について更なる検討を加えてみたい。定忠以前の大中臣家の和歌活動も視野にいれながら、定忠の歌人としての活動のあり方について考察を行いた

い。なお、文書については前稿同様、マイクロフィルム(整理番号17-A・マイクロ番号MF2)の閲覧による。

『大中臣系図』は、森瑞枝氏や、<sup>(3)</sup>『神宮祭主藤波家文書目録』<sup>(4)</sup>において、鎌倉時代のものであり、祭主大中臣定忠の自筆とされている。マイクロフィルムを閲覧する限りでも字体は鎌倉期のものであり、やはり内容上定忠のものと見るのが穏当であろう。『神宮祭主藤波家文書目録』によれば、六通の文書について、

定忠嫡々相承系図

〔輔親卿補任〕

輔親卿判者事

一枚・<sup>(5)</sup>三四×五〇厘(文書番号122)

一枚・堅紙・三四×四二厘(文書番号145)

一枚・堅紙・三四×四一厘(文書番号150)

## 頼基事

一枚・堅紙・三四×三四糎 (文書番号449)

前平中納言進近衛大殿状案并大殿御文案

一枚・堅紙・三四×四四糎 (文書番号37)

## 〔大中臣定忠消息〕

一枚・堅紙・三四×五〇糎 (文書番号38)

と記されている。本稿における文書名においても、この名称を用いることとしたい。

この文書は、定忠自身の大中臣家の歌人としての自覚を窺い知ることができ、貴重な史料であることは前稿で述べた。大中臣定忠は鎌倉期の伊勢の神官で、従三位定世男、文永九年(一二七二)生、正和五年(一二二六)一月二十四日没、四五歳<sup>③</sup>、また延慶二年(一二三〇)九月二十九日に従三位、永仁七年(一二一九)二月二十八日に祭主となつてゐる<sup>⑥</sup>。そして、定忠の和歌の事跡については前稿に譲るが、定忠は勅撰歌人であり、『新後撰和歌集』一首、『玉葉和歌集』一首、『風雅和歌集』三首に入集していることを再確認しておきたい。本稿では、伊勢の神官であり、また和歌の家でもある大中臣家の歌人として活躍した定忠の位置を改めて見定めていきたい。

## 二 定忠自筆の文書とその内容

それではまず、以下に文書を見ていきたい。

## 凡例

一、国学院大学日本文化研究所蔵藤波家文書、六通合巻の『大中臣系図』を翻刻した。翻刻はマイクロフィルムによる(整理番号17-A・マイクロ番号MF2)。マイクロフィルムの順序に従い翻刻、紹介を行うものとする。

一、清濁の区別は行わなかったが、適宜私意により句読点を施した。  
一、改行は行わず原本のままとした。

## 一通目「定忠嫡々相承系図」

## 定忠嫡々相承系図

祭主

小徳冠前事奏官国子大連公―大錦上前事奏官国足

祭主

祭主 中納言左大弁左京大夫神祇伯 祭主 右大臣皇太子傳神祇伯

意美磨

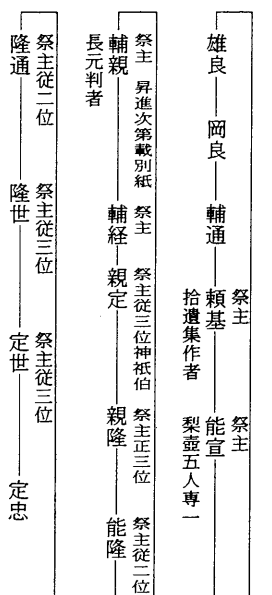
万葉集作者歟

清磨

同集作者歟

今磨

常磨



たまもかりし昔の跡にのこる

身をあはれとも見よ和哥の

浦人

五十鈴河おなし流に

つかへても世さへく

たれは

身やうきに

なる

この文書に見える人名は、『尊卑分脈』において全て確認出来るが、『尊卑分脈』には親定と親隆の間に親仲という人名が見える点  
が異なっていることは前稿で述べた。更に具体的に見ていくと、親

仲は、『尊卑分脈』に正四下祭主とあるが、これは誤りであり、『祭主補任』等には歴代の祭主の中に名が見えない。親仲は、清親の阻止により、祭主に任ぜられなかったのである。

また、五人の人名の左傍には、和歌の事跡が記されている。まず  
意美麿には「万葉集作者歟」、それに続く清麿には「同集作者歟」  
とある。後者の清麿については、『万葉集』に、

明日香河 河戸乎清美 後居而 恋者京 弥遠曾伎奴

右一首左中弁中臣朝臣清麿伝誦古京時歌也

(巻一九・四二五八)

安麻久母尔 可里曾奈久奈流 多加麻刀能 波疑乃之多婆波

毛美知安倍牟可聞

右一首左中弁中臣清麿朝臣 (巻二〇・四二九六)

美牟等伊波婆 伊奈等伊波米也 宇梅乃波奈

知利須具流麻弓 伎美我伎麻左奴

右一首主人中臣清麿朝臣 (巻二〇・四四九七)

和我勢故之 可久志伎許散婆 安米都知乃 可未乎許比能美

奈我久等曾於毛布

右一首主人中臣清麿朝臣 (巻二〇・四四九九)

宇流波之等 阿我毛布伎美波 伊也比家尔 伎末勢和我世呂

多由流日奈之尔

右一首主人中臣清麿朝臣 (卷二〇・四五〇四)

多可麻刀能 努敵波布久受乃 須惠都比尔 知与尔和須礼牟

和我於保伎美加母

右一首主人中臣清麿朝臣 (卷二〇・四五〇八)

とあり、その名を確認することはできる。それに対し、意美麿は、『万葉集』中にその名を確認することはできない。両者ともに、『万葉集作者歟』『同集作者歟』と「歟」の字が記されているが、続く頼基は「拾遺集作者」とあるように、同集に大中臣頼基の名で、ひとふしに千世をこめたる杖なればつくともつきじ君がよはひは (卷五・賀・二七六)

しほたるる身は我とのみ思へどもよそなるたづもねをぞなく  
なる (卷一九・雑恋・一二四七)

と二首入集している。また能宣には「梨壺五人専一」と記されている。これは、村上天皇が天暦五年(九五二)、勅命により梨壺に和歌所を置き、大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城の五名を寄人として任じたことに基づき、撰者は梨壺の五人と称された。系図では、能宣が梨壺の五人のうちの一人であったことを示しているものである。この五人は、『後撰和歌集』の撰者などを務めたのであり、大中臣能宣は、その一人に選ばれていることから、「梨壺五人専一」には、能宣が歌人として名譽ある地位にあったことを記

し留めたものであろう。そして、輔親の左傍には「長元判者」とあるが、これは長元八年(一〇三五)五月十六日、関白左大臣藤原頼通の賀陽院において、所謂「賀陽院水閣歌合」が催され、ここで輔親が判者を務めたことが記されたものである。三通目の「輔親卿判者事」において、その内容が具体的に記されているため、それについては後述する。頼基、能宣、輔親については、三者ともに勅撰歌人であり、頼基だけでなく、能宣や輔親も『拾遺和歌集』に入集しているのであるが、後者二人は勅撰集入集を記すのではなく、「梨壺五人専一」「長元判者」といった、歌壇における活躍ぶりを書きとどめている点が興味深い。

ところで、輔親の右傍には、「昇進次第載別紙」とある。続く二通目の文書には、「輔親卿」と題して輔親の補任の次第が記されている。これが「別紙」に相当することは前稿で触れた。これによるならば、次に示す二通目の文書は、一通目とほぼ同時期に書かれた可能性が考えられよう。

## 二通目「輔親卿補任」

輔親卿

圓融院御宇為藏人所衆云々

花山院御宇

寛和二年補文章生

一条院御宇

永延二年八月任勘解由判官

同御宇

永祚二年八月兼

同御宇

皇太后宮權少進 長保三年二月廿八日補

同御宇

祭主 寛弘六年十一月一日補次侍從

後一条院御宇

治安

同御宇

二年正月転伯 長元七年二月五日叙従三位

後朱雀院御宇

長暦元年十一月廿日叙正三位

輔親の昇進の次第は、例えば『祭主補任』においてこれ以上に詳述されている。『祭主補任』は、序文や奥書などがなく、具体的な編纂年代や編者を知ることとはできないが、ある時期に編纂され、その後次々に書き継がれていったもので、応永十六年(一四〇九)に補任された通直の項までに及ぶ。『祭主補任』自体が、祭主に関するまとまった文献としては最も詳細なもので、補任の経緯や在任中の事跡などが書かれている。『祭主補任』の裏には「(永和五年(一

三七九)三月五日、以三代々相伝本一書写、度々令校合一畢。大中臣朝臣(花押)とある。これは記された年代から七十五代の親世のものとして推定されており、よって表にある「祭主従三位行神祇大副大中臣朝臣(花押)」は、それ以前に在任していた祭主によるものという。このように、歴代の祭主の経歴などが記載され、書き加えられて本書に至る以前の書の類が、代々伝えられ、定忠の時代にも何らかのものが存在しており、そういったものからの引用である可能性も考えられよう。なお、『祭主補任』とこの文書の記載内容は類似点もあり、詳細な『祭主補任』の類の書物からの抜粋とも考えられるかもしれないが、相違点も見出せるのであり、即断はできない。この文書の「永祚二年(九九〇)は『祭主補任』では改元後の「正暦元年(九九〇)、同じく「寛弘六年十一月一日補次侍從」は『祭主補任』に見えず、「長元七年二月」は「長元七年十一月」、「長暦元年(一〇三七)は「長元九年(一〇三六)となっている。また、「圓融院御宇為藏人所衆云々」は「元藏人所衆」とあるのみである。よって、更に詳しく記された類書が存在していたのかもしれない。いくつかの書物を披見した上で記されたものであるかもしれない。以上二通目の文書には、一通目「定忠嫡々相承系図」の輔親の右傍に「昇進次第載別紙」と書かれていた「昇進次第」が具体的に記されていたが、三通目の「輔親卿判者事」には、一通目の同系図、

輔親の左傍の「長元判者」について詳しく書かれている。

### 三通目「輔親卿判者事」

#### 輔親卿判者事

或記云、長元八年五月十六日、於賀陽院水閣

後一条院御行  
宇治殿御坐

有和哥合。卅講聴聞之餘有此興。判者中三位輔親卿

賜祿

蘇芳織物  
掛并袴等

於東簀子敷趨拜之間、超卿相之座。

是情感之餘、不知手之舞足之蹈歟。

或記云、判者輔親卿座籍円座臨期仰之藏人促之。

件度直衣布袴云々。

同記云、知足院殿仰云。経信卿語シハ、件日、賀陽院東

門ヨリ上達部ノ前声ス。見之者輔親也。加伊練

重ヲ着ス。加伊練重ハ紅打下重、裏ハ張也云々。

①

②

先に触れたように、三通目の「輔親卿判者事」には、「定忠嫡々相承系図」の輔親の左傍に記された「長元判者」について、即ち長元八年（一〇三五）五月十六日、関白左大臣頼通の賀陽院において催された歌合、所謂「賀陽院水閣歌合」で判者を務めた輔親のことが記されている。よって二通目と同様、この文書も一通目の文書と

ほぼ同時期に書かれた可能性が考えられよう。「輔親卿判者事」では、この歌合において輔親が祿を賜ったこと、そしてその折の様子、また、装束についても記されている。これらの内容は、「或記二云」や「同記云」と記されているが、具体的には何の記を指すのであろうか。これと近似する内容が、十卷本類聚歌合卷九所収「殿歌合」<sup>(8)</sup>や、藤原清輔の『袋草紙』<sup>(9)</sup>に見出せる。

①の「或記云」の内容は、「殿歌合」に、本歌合について記される冒頭部分から、

長元八年五月十六日、於賀陽院水閣有和歌合。卅講聴聞之余有此興矣。（中略）

中三位賜祿 蘇芳織物  
掛并袴。於東簀子敷趨拜之間、超卿相座。是情感之余、不知手之舞足之蹈歟。

とあり、ほぼ同文的な一致が見られる。また、①の内容は、「袋草紙」においても、

三十講歌合時、判者中三位賜祿。 蘇芳半掛袴云々。（中略）

三十講歌合時、中三位賜祿。於東簀子敷起拜之間、超卿相座。是情感之余、不知手之舞足之蹈歟云々。

（下巻・一、和歌合次第 内裏儀）  
という類似した記述が見える。但し、傍線部「起拜」の部分は、文

書と「殿歌合」では「趨拝」となっている。勿論即断はできないが、これを見る限りでは、文書は「殿歌合」により近い記載内容となる。

②の内容は、『袋草紙』に、

判者円座臨期仰之。藏人役也。(下巻・一、和歌合次第<sup>内裏儀</sup>)

判者輔親卿直衣布袴云々へ直衣下襲、用後帶云々。知足院入道

殿仰云。経信卿語云、件日、賀陽院東門ヨリ上達部ノ前声あり。

見之輔親也。加飛練重ヲ着、目出カリシ。事也云々。かひ練重

ハ紅打二裏ハ張也。(下巻・一、歌合日装束)

とあるのとはほぼ一致している。②は、「殿歌合」では管見に入らない。

よつて、断定はできないが、①②は共に『袋草紙』に類するものからの引用であり、『袋草紙』そのものの可能性も視野に入れておきたい。②には「或記云」、続いて「同記云」と記されたのは、①が『袋草紙』の「和歌合次第<sup>内裏儀</sup>」のまとまった部分から抜粋しているのに対し、②は「和歌合次第<sup>内裏儀</sup>」と「歌合日装束」からの抜粋によるためであろう。定忠がこのような類のものを何らかの形で披見し、書き留めていることは非常に興味深い。

次に、四通目の「頼基事」においては、「輔親卿補任」と「輔親卿判者事」に書かれた輔親の祖父にあたる頼基の和歌の事跡が記されている。

#### 四通目「頼基事」

##### 頼基事

或記云、延喜七年九月十日、行幸大井河。和哥作者

八人<sup>大中臣頼基</sup>同日宇多院御幸同河邊。件

頼基于時無官六位也。而着衣冠持笏之由、

見彼時記云々。

延喜七年(九〇七)九月十日に、頼基が大井河の行幸に供奉した内容が記されている。『頼基集』二一番歌詞書に「大井川の行幸にさまざまのだいどもをよませたましに、みづにうかぶといふだいを」とあり、続く二八番歌までの八首が見える。醍醐天皇延喜七年九月十日の行幸であるが、具体的にその折の和歌の作者は八人で、その一人が頼基であつたこと、そして同日に宇多院が御幸し、頼基はその時無官六位であつたが「着衣冠持<sup>て</sup>笏」であつたことが記されている。保坂都氏は、大井川行幸が頼基二十二歳の頃のことであり、また「頼基集」の宇多天皇との関係において残された和歌四首を挙げ、頼基は宇多天皇の在位中、及び讓位後も、歌人として信任を得ていたことが察せられると指摘されている<sup>10)</sup>。なお、この記述の典拠となつた「或記」、また「彼時記」は未詳であるが、おそらく

くこういった歌会の記録が書かれたものが存在していたのであろう。家記に類する「随行記」などがあつたことも想定すべきであろうか。「云々」と記されていることや、三通目の文書の引用の仕方も考え合わせれば、大井川行幸和歌について書かれた書の中から、頼基に関する部分を抜粋したものと考えられよう。

以上四通の文書を見てきたが、二通目の「輔親卿補任」は一通目の「定忠嫡々相承系図」における輔親の右傍に書かれた「昇進次第載別紙」、三通目の「輔親卿判者事」は、一通目の同系図における左傍に書かれた「長元判者」の内容が記されていたものと見受けられる。また、この三通目の文書は長元八年の「賀陽院水閣歌合」で輔親が判者を務めたこと、四通目の「頼基事」は大井川の行幸に供奉した頼基のことが記されており、いずれも和歌の事跡について「或記」から見出した内容を書き記したものであることが分かる。この点と、各文書の筆跡の類似も加味すれば、以上四通の文書は、ほぼ同時期に一式のものとして書かれたと考えられよう。

続いて、五通目の文書を見ていきたい。

五通目 「前平中納言進近衛大殿状案并大殿御文案」

前平中納言進近衛大殿状案

去夜之趣、即参申入候キ。能宣口公宴

所見候ハ、猶可被注申之由、可「<sup>之旨カ</sup>」被「<sup>旨カ</sup>」下候。  
可令申入給候。謹言

徳治二年

七月十日

経親

前民部少輔殿

大殿御文案

能宣天徳哥合人数候。又寛和二年禁裏

哥合哥仙上首候。是等例見出候之間、今朝

令申之处、被向深草とて持帰候之間、直

持参御所、内々可進之由仰含候之处、只今被下

御返事候也。就此例可有沙汰之躰、被仰下候也。

端書云

天徳歌合大略歌合根元候。

彼人数之条、准拠可然候歟。

五通目の文書は、二通を一紙に書写したものである。①は、日付

の下に経親とあることから、「前平中納言（経親）」が、「前民部少輔殿」に宛てた書状の写しであることは前稿で触れた。具体的に見ていくと、①は、院の意向が、近衛大殿に伝えられたのであるが、

②

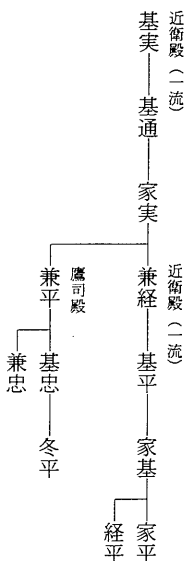
①



それぞれの近臣・家司がその伝達を行っているものである。結論から言えば、伏見院の近臣平経親が、鷹司基忠の家司「前民部少輔」に宛てた書状の写しである。

「前民部少輔」は不詳であるが、その他の人物を推定していくと、まず「前平中納言」即ち平経親は、平時継男で、生没年は未詳である。経親は、伏見院の近臣で、文保元年(一一三二)には伏見院のあとを追って出家している。

次に「近衛大殿」とは鷹司基忠と推定される。例えば、ちょうどこの前後の頃のことと記されている後深草院二条の『とはずがたり』においても「近衛大殿」とあり、この人物は鷹司兼平と見られている。但し兼平は永仁二年(一一九四)に没しているので書状の「近衛大殿」には当たらない。『尊卑分脈』でこの周辺の関係を示すと、



とあり、近衛兼経も鷹司兼平も共に、もともと近衛家の同じ家系から分かれている。鷹司の家で近衛と言われるのは問題ないことであ

る。また大殿は摂関経験者に絞られるので、注目すべきは、兼平の一男で、徳治二年に散位で前太政大臣従一位、「前関白」であつた鷹司基忠(六十一歳)となる。他に摂政、関白となつた人物に、兼平の二男、兼忠がいるが、正安三年(一一三〇)年に既に没している。なお、基忠の男(『尊卑分脈』に「為摂政兼忠子」と記される)に、徳治二年に左大臣従一位であつた鷹司冬平がいるが、摂政となつたのは徳治三年(一一三〇)のこと、「大殿」には当たらない。よつて、鷹司基忠が五通目の文書中の「近衛大殿」であると推定できる。

実際、基忠の詠歌は、『統拾遺和歌集』五首入集以後、勅撰集に数多く入集している<sup>⑪</sup>。また、後宇多院が当代の主な歌人から召した百首で、二条為世撰の『新後撰和歌集』の資料となつた、嘉元元年(一一三〇)詠進とされる嘉元百首や、基忠詠の詞書に「嘉元二年伏見院に三十首歌たてまつりけると、社頭祝」(風雅集・卷二〇・賀・二二八三(二二七三))とあるように、伏見上皇が人々から三十首を召した折、基忠も詠進している。基忠は、和歌の道に積極的であつたことが知られる<sup>⑬</sup>。

②は、①との関係から、近衛大殿(基忠)による「御文」の写しで、経親への返答と考えられる。この内容を知るためには、「大殿御文案」に書かれた「深草」が重要な意味を持つてくる。

これだけでは誰に先例を伝えようとしたのかについては容易に

特定し難いが、この「深草」の地周辺の、徳治二年（二三〇七）七月十日前後の出来事を追っていくと、七月十二日から長講堂で後深草院御八講が行われ、十六日には後深草院の忌日で、深草法華堂で読経があり、伏見・後伏見両上皇が御幸している。<sup>(14)</sup>『公衡公記』の嘉元二年（二三〇四）七月「後深草院崩御記」十七日条には、後深草院の葬送に関する内容が記されており、「次御車東行、出御京極面東西南門」の後、「行列」で供奉した人々が記されているが、その中に「前平中納言」即ち経親の名が見える。また、この続きに、

依「御存日御遺誡」、以「深草経親卿山庄之傍山」為「山作所」、

法華堂造営以前、御骨暫可奉<sup>三</sup>安置安樂行院<sup>経親卿宮領之堂也、在「深草」</sup>

とあり、これから、経親が後深草院崩御時に深草に行っていたこと、そして「深草」には経親の山庄があったことも知られる。おそらく、徳治二年七月十日前後にも、経親は法会の準備などのため、深草に行っていたものと推測できる。よって、この部分の梗概は、別解も考えられようが、試案として以下のように大殿から経親への形式として解しておく。能宣参加の歌合の先例を見出したので、今朝（大殿から経親を通して院へ）ご返事を申し上げようとしたところ、経親は「深草」に向かわれていると、（使者である前民部少輔が）持ち帰ってきたので、（院の）御所に直接持参して、内々にお渡ししてもらうよう仰せ含めたところ、只今（院から）その返事があった

た。（その内容は）この先例に従って沙汰するようにと（院が）仰せられたことである、と記されている。

以上より、深草と関わりの深い経親と持明院統、そして基忠との繋がりが考えられるのではないだろうか。後深草院の崩御を悼み、伏見院、西園寺実兼等、持明院統の皇族や廷臣の歌が『玉葉和歌集』や『風雅和歌集』等の勅撰集に多く残されているが、<sup>(15)</sup>その中に基忠がいる。

後深草院かくれ給ひてのとし、神な月のはじめつかた、円

<sup>（前可基忠）</sup>

光院入道前関白もとより文をたてまつると、冬にもほど

なくなりぬることに思ひとがめらるるよし申して侍りける御返事のついでに

思へた。だつめの秋よりしをれきてしぐれにかかる袖のなみだ

を  
（風雅集・卷一七・雑下・二〇三二）

御返し  
円光院入道前関白太政大臣

おもひやるおいのなみだのおちそひて露も時雨もほすひまぞなき  
（風雅集・卷一七・雑下・二〇三二）

とあり、基忠が、後深草院崩御の年の十月に、伏見院に弔歌を送ったことが知られる。また、『玉葉和歌集』に、経親が、

おなじ年の秋のすゑつかた、人のもとへよみてつかはしける

前中納言経親

ふか草の山のもみぢにこの秋はなげきの色をそへてこそみれ

(玉葉集・卷一七・雜四・二四〇七)

と詠じ、詞書の「おなじ年」とは、この一つ前の歌の詞書に「後深草院かくれさせ給ひにける年の長月の十日あまり、永陽門院御くしおろさせ給ける夜、うちしぐれ侍りければ」とあり、後深草院崩御の年であることが分かる。

以上より、書状に見える経親は言うまでもないが、基忠も共に伏見院(持明院統)と関わりが深かったことが窺える。

こういった関係を踏まえると、おそらくは伏見院(持明院統)周辺で、何らかの和歌の会等を行うにあたり、その先例として、能宣の歌合への参加の有無が前例となるか議論されていたことが推測される。それに関するやりとりの文書の写しが、五通目の文書である。よって、院とは伏見院と推定しておきたい。但し、この頃の歌会で、具体的に特定できるものには至っておらず、更なる考察が求められよう。

ところで、五通目の文書では、能宣の歌合への参加が問題となっている。②の「大殿御文案」即ち基忠の御文の写しには、能宣が天徳歌合や禁裏歌合に参加している先例を見出したと述べられている。能宣は、天徳四年(九六〇)三月三〇日の内裏歌合に参加しており、また寛和二年(九八六)六月十日の内裏歌合では「哥仙上首」

とあるように、左方筆頭歌人であった。また本来袖に書かれた追手書が「端書云」として書写された部分には、天徳歌合は「大略歌合根元」であり、この歌合への能宣の参加が、準拠する先例として問題ないことが記されている。定忠がこの書状を写し留めた理由は、特にこの部分から推測できる。能宣の例を先例として歌合への参加資格を得ることができた人物、準拠されるにふさわしい人物とは、他ならぬ定忠だったのであろう。企画中の歌合への参加資格の可否が問われており、天徳歌合に参加していた能宣の先例に従って、メンバーに加えてもよいのではないか、という大殿の見解が院に示され、その許可を院から賜ったのである。定忠自身が参加の許可を得たならば、定忠にとつてこの書状がいかに重要であったかは想像に難くない。そして、この書状を定忠自らが写し取った理由は、単に祖先の先例が問われていたのみならず、院から定忠の歌合への参加の許可を得たことが記されている点に窺えるのである。定忠にとつて大変名誉なことであり、撰家を介して院歌壇へ入り込もうとする意欲に注目させられる。

なお、この五通目の文書の字体は「定忠嫡々相承系図」「輔親卿補任」「輔親卿判者事」「頼基事」までの四通の文書の筆致とは異なっている。よって五通目の文書も定忠の記したものと見るならば、四通の文書とは別の機会に記され、また徳治二年(一一三〇七)七月十

日とある記載によれば、この頃やりとりされたものを、後に定忠が写し取ったものと推定されよう。

# 六通目「大中臣定忠消息」

判者事。能々

撰勘候て、念々可申

入候。外記・官などにも

内々可相尋候。

定忠恐惶謹言。

七月七日 定忠上

六通目の文書は、判者に関する定忠の見解を記した消息である。この消息の具体的な年次や、宛先は明らかではないが、内容は、判者についてよくよく考え選び、早々に申し入れること、外記（局務）や官務等にも内々に尋ねてみることに記されることから、何らかの歌合における見解と考えられる。仮に『伊勢新名所絵歌合』の判者に対する定忠の見解であるならば、興味深いことは前稿に示した。既にこの頃には歌合に対する強い関心を持っていた可能性は高いだろう。但し、「定忠恐惶謹言」とあり、身分の上の者に宛てた

ものであると考えるならば、誰に宛てたものかは容易には推測し難い。『伊勢新名所絵歌合』は永仁三年（一二九五）以前、定忠二四歳の頃のもので、定忠は左方筆頭歌人として参加者の中でも身分が高かった。判者について問われても不自然ではないだろうが、関連する史料は見出せない。また時期的に少し早いかもしれない。むしろ現存しない他の歌合への参加の可能性も視野に入れるべきだろう。六通が一つのまとまりとして残されていることを勘案すれば、六通目の文書は、五通目の文書に書かれていた公宴に関して諮問を受けたときのものとして推測される。現段階では断定できないが、こちらの可能性の方が考えられるかもしれない。五通目の文書は徳治二年七月十日、六通目の文書は七月七日とあり、月日で見れば三日違いとなる。徳治二年時には、既に祭主に任じられており、その四年前には『新後撰和歌集』への入集も果たしている。判者について問われることには問題ないと見ておくとしても、定忠の参加が院から命ぜられる数日前となる。この時既に定忠の参加はほぼ内定しており、残るは院の意向を伺うのみ、という状況であったのだろうか。

いずれにせよ、五通目の文書には「公宴」とあるように、公的な行事としての歌合を想定すべきであろうか。より大がかりな歌合が予定されていたことが想像されることを付記しておきたい。大中臣家の祖先の和歌活動を留める四通目までの文書も含め、六通全ての

文書を視野に入れるならば、祖先の和歌における活躍を先例として、定忠が和歌の道に積極的であった証となる、大変興味深い史料である。

### 三 おわりに

以上、前稿を踏まえた上で、六通の定忠直筆の文書の内容について、更に検討を加えてきた。「定忠嫡々相承系図」は、単に大中臣家における、定忠までの代々の祭主の相承系図を記したものであるという以上に、歌人としての活躍が記し留められていた点に着目された。続く「輔親卿補任」と「輔親卿判者事」は輔親、「頼基事」は頼基、「前平中納言進近衛大殿状案」「大殿御文案」は能宣に関する昇進の次第や和歌の事跡を定忠が書き留めたものであり、特に定忠の祖先が歌合等に参加した和歌の事跡、あるいは参加した歌合の先例が定忠の時代に話題に上っていたことを書き留めている点に目を向けるべきであろう。定忠が能宣の歌合への参加を先例として、歌合への参加資格を、院から賜わるに至ったのである。このような定忠の祖先の和歌における活躍が、定忠の時代在先例として注視されているのであり、定忠自身が先例について直接尋ねられる機会があった可能性も十分考えられよう。むしろ、度々何らかの和歌の会が催されるにあたり、定忠の祖先の参加に関する先例を、定忠自身がア

ピールするために、書き留めておく必要性を感じていたのかもしれない。定忠が、祖先に偉大な歌人を持つ大中臣出身の歌人として和歌活動を広げていくために、祖先の先例を知ることが不可欠なことであったはずである。いずれにせよ祖先の和歌の事跡について関心を高めていたことが窺えるのである。六通の文書は、大中臣家の出身であり、和歌の道を伝え受けてきた定忠の、特に頼基・能宣・輔親の和歌の事跡への関心、また定忠の時代に、祖先となる大中臣家の歌人の活躍が先例として注視されていたことが窺える資料として、大変貴重なものである。定忠の歌人としての交流や積極的な和歌活動を知る上でも重要な資料である。

註 (1) 森瑞枝「中世以降の祭主と和歌」(藤波家文書研究会編『大中臣祭主藤波家の歴史』一九九三年三月、統群書類従完成会)。

(2) 一九九七年の神宮祭主藤波家文書展で発行された「神宮祭主藤波家文書展解題目録」(国学院大学日本文化研究所編、一九九七年一月)において、六通の『大中臣系図』のうち、「定忠嫡々相承系図」「輔親卿補任」「輔親卿判者事」の三通の概説がなされている。

(3) 註(1) 前掲書。

(4) 国学院大学日本文化研究所編『神宮祭主藤波家文書目録』一九九七年三月。

(5) 生年は没年により逆算したものである。なお、没日は「祭主補任」(神道大系)・「公卿補任」・「大中臣氏系図」(『統群書類従』)とも同日である。以下特に断らない限り「祭主補任」に拠る。

- (6) 『公卿補任』に拠れば、祭主は同二三日である。
- (7) 『神道大系』神宮編四、祭主補任の解題に拠る。以下同じ。
- (8) 正確な伝承によれば、本来「賀陽院水閣歌合」という呼称はなく、呼称は様々であった(萩谷朴「平安朝歌合大成増補新訂第二巻」一九九五年一月、同朋舎出版)。十巻本歌合巻において、本歌合は巻九所収であり、「殿歌合」は十巻本歌合巻の総目録に見える呼称である。引用は前述十巻本に拠ることから、この名称を用いておく。(十巻本(甲本)と廿巻本(乙本)が知られるが、該当部分における十巻本「是情感之余」の箇所が、廿巻本では「是情感之条」とあり、やはり前者の方が適切であろう。)なお、十巻本巻九所収「殿歌合」は、益田家旧蔵伝西行筆水閣歌合の元本によって知られる。
- (9) 『袋草紙』において、当該箇所では「卅講歌合」という呼称を用いている。引用は新日本古典文学大系『袋草紙』(原文)に拠る。
- (10) 保坂都『大中臣家の歌人群』(一九七二年三月、武蔵野書院)。また、文書に和歌の作者は八人とあるが、頭昭注に指摘されるように、六人と見られている。(山本利達「貫之の序」大井川行幸和歌序をめぐって)『国語国文』第三九巻第四号、一九七〇年四月、等。井上文雄氏は、一名加え、七人と試算する(「大井河行幸和歌考証」『国文注釈全書』第一巻、一九六八年八月、すみや書房)。文書においては、筆致からも八であり、裁断等により六が八になったとは考え難い。
- (11) 西山恵子「大殷考」(『史窓』三六号、一九七九年三月、京都女子大学史学会)。
- (12) 『和歌大辞典』に、「貴顕ゆえに二条・京極両派も重視し勅撰集に総計八五首入集」とある。『勅撰作者部類』等参照。
- (13) 井上宗雄氏(『中世歌壇史の研究 南北朝期』改訂新版、一九八七

年五月、明治書院)に詳しい。また、有吉保氏(『中世散佚私撰集の残葉紹介』『和歌史研究会会報』第一〇〇号、一九九二年一月)、久保木秀夫氏(『自葉集』と伝二条為道筆西宮切)『国文学研究資料館紀要』第二八号、二〇〇二年二月、及び「散佚歌集切集成 本文篇」『国文学研究資料館文献資料部「調査研究報告」第二三三号、二〇〇二年一月)によって、鷹司基忠の周辺で編まれた未詳私撰集の残簡が紹介され、久保木氏により、これは基忠周辺の歌を集めた「庭林集」の可能性が高いと指摘されている。基忠の和歌活動を知る上でも、注目されよう。

- (14) 『実躬卿記』(『続史愚抄』)参照。後深草院崩御の折のことは、「増鏡」『とはすがたり』等にも記されている。

- (15) 『公衡公記』(史料纂集第四)に拠り、適宜返り点を付した。引用箇所は、この記の別記である嘉元二年七月の「後深草院崩御記」(宮内庁書陵部蔵本(伏見宮旧蔵)に拠るものである)。

- (16) 福田秀一氏(『後深草院の葬送と富小路殿への出入その他について』「とはすがたり」注解補正その一)『解釈』一九七九年九月、教育出版センター)によって作者や詠歌時期がまとめられている。
- ※和歌の引用は、『新編国歌大観』に拠る。

〔付記〕本稿は平成十五年度和歌文学会七月例会(於東京大学)における口頭発表の一部に加筆したものである。席上ご意見を賜った諸先生方に深く感謝申し上げます。また国学院大学日本文化研究所及び図書館の方々に、厚く御礼申し上げます。

(本学大学院博士後期課程三年)